霊・魂と身体をめぐる中世的表現

森　正人

一　はじめに

中世に入ると、人間の肉体と魂の関係、あるいは神霊や異類（鬼、天狗など）と人間との関係について、日本人の考え方には変化が現れる。それは顕著ではないが、院政期から鎌倉時代にかけてゆるやかに推移していく様が観察される。ここにその変化の相を把捉し、霊的存在と人間の肉体とをめぐる中世的表現の特徴を記述する。そのことを踏まえて、源平盛衰記における安元の大火の原因に関する叙述の読解を試みるものである。

二　「つく」と「いる」

古代の人々は、霊的存在が憑依することを一般に「つく」あるいは「よる」と捉え表現していた。万葉集巻第二には大伴宿弥安麻呂の次のような歌が載る。

玉葛実成らぬ木にはちはやぶる神そ著くといふ成らぬ木ごとに

また、日本霊異記上巻「雷の嘉を得て子を生ましめ、強き力在る縁第三」は、落ちた雷の空に昇るのを助けてやった農夫が、強力の子を授かったという説話である。雷は言う、「寄於汝令胎子而報」と。注釈の多くは狩谷棭斎の『校本日本霊異記』の訓に従って「汝に寄せて」と読むが、適切ではない。新日本古典文学大系のように「汝に寄りて子を胎ましめて報いむ」と解釈すべきであろう。雷神が農夫に「よ（寄・拠・依・憑）」り、農夫の身体を通じてその妻に子を孕ませたという関係である。玉依毘売（古事記上巻）、玉依姫（日本書紀巻第二）、玉依日賣（山城国風土記逸文）の名も、神霊の憑依する尊い女の意にほかならない。

こうした憑依を意味する「よる」は平安時代に入ると用いられることが少なくなるが、今昔物語集巻第三十一第七に見える。右少弁藤原師家が、関係の

絶えた女と久しぶりに対面したものの、その場で突如死なれてしまう。そのことがあってから、いくばくもなく師家は病死し、理由を女の死霊が憑依したとして、次のように「寄る」と表現している。

然テ、其レヨリ返テ、弁幾モ無クテ病付テ、日来ヲ経テ遂ニ失ケリ。其ノ女、寄タルニヤトゾ。

栄花物語にも、〈もののけ〉に悩まされていた後冷泉天皇がやや回復して、周りが安堵する場面に次のようにある。

かやうの御有様は、いかでかはよりつき参らせんと思へど　（巻第三十六「根あはせ」）

ただし、平安時代中期以降になると、神霊の人間への憑依を表現する「よる」は劣勢となり、右の栄華物語にも用いる「つく（付・附・着・著・託・詫）」が一般に用いられる。[1]「よる」の語は、〈もののけ〉調伏に与る霊媒を「寄女」（「よりめ」と読むべきか）、「よりまし」（平家物語巻第三「御産」）と称するなど、命脈を保っているものの、平安時代中期以降は「つく」に圧倒されていく。

一方、「いきずたま（生霊）」に関しては、平安時代中期から「たま（霊・魂）」が「い（入）」る現象として把握されていたらしい。

落窪物語第二、女君を迫害した継母が男君による報復を受けて口惜しがるところを次のように表現する。

いかで生きずたまにも入りにしがなと、手がらみをし入り給ふ。

「生きずたまに入る」とは、生霊として（生霊となって）取り付き相手の中に入り込むことを言うと解される。今昔物語集巻第二十七第十九にも、

近江ノ国ニ御スル女房ノ、生霊ニ入給ヒタルトテ、此ノ殿ノ、日来不例ズ煩ヒ給ツルガ、此ノ暁方ニ、「其ノ生霊現タル気色有」ナド云ツル程ニ、俄ニ失給ヌル也。

と表現する。特に生きずたまについて「入る」と表現する理由は、「たま」が人の身体を出で入る存在と認識されるようになったからであろう。そのことは、伊勢物語第一一〇段に、

思ひあまり出でにし魂のあるならん夜深く見えば魂むすびせよ

などと詠まれ、うつほ物語「俊蔭」巻、母を養うために山に入った童が熊に命乞いをする言葉に「口なくては、いづこよりか魂通はむ」とあることから窺われる。

三「よる」から「いる」へ

人間における肉体と魂の関係を「寄る魂」から「出で入る魂」へと変化する様として具体的に示すのは、死者が本来のではなく別人の肉体を得て蘇る説話である。

ここでは、日本霊異記中巻第二十五縁に載る二人の衣女の説話を通して説明する。讃岐国山田郡の布敷臣衣女が死に臨み閻羅王に召されようとするも、閻羅王の使者は代わりに同じ国の鵜垂郡の衣女を連れて行く。別人であることが明らかになって、鵜垂郡の衣女は娑婆に帰されるが、遺骸はすでに火葬に付されていた。そこで、閻羅王の命により、鵜垂郡の衣女は山田郡の衣女の身体を得てよみがえったというものである。日本霊異記は、二人の衣女の身体と蘇生の関係を次のように記述する。[　　]に読み下し文を添える。

彼鵜垂郡衣女者、帰家、経三日頃、焼失鵜垂郡衣女之身矣。更還愁於閻羅王白、失体無依、時王問言、有山田郡衣女之体耶、答言有之、王言、得其為汝之身、因為鵜垂郡衣女之身而甦、即言、此非我家、々々有鵜垂郡。[彼の鵜垂郡の衣女は、家に帰る。三日の頃を経て鵜垂郡の衣女の身を焼き失ふ。また還りて閻羅王に愁へて白さく、「体を失ひて依るところ無し」とまうす。時に王問ひて言はく「山田郡の衣女の体有りや」とのたまふ。答へて言さく、「有り」とまうす。王言はく、「其れを得て汝の身とせよ」とのたまふ。因りて鵜垂郡の衣女の身と為りて甦る。即ち言はく、「此れ我が家に非ず。我が家は鵜垂郡に有り」といふ。]

日本霊異記は、冥府にある鵜垂郡の衣女と、現世に遺った身体との関係を「依」（よる）と記述している。ただし、日本霊異記に、「よる」ものが魂であるとか霊であるとか説明されているわけではない。新日本古典文学大系は、脚注に「死に際して魂が肉体から

分離して輪廻し生死する主体となる、という考え方とは異なる」と説く。

一方、日本霊異記を引用する今昔物語集巻第二十第十八は次のように記述する。

「（略）彼ノ鵜足ノ郡ノ女ヲバ可返シ」ト。然バ、三日ヲ経テ、鵜足ノ女ノ身ヲ焼失ヒツ。然バ、女、女ノ魂、身無シテ返入ル事不能シテ、返テ閻魔王ニ申サク、「我被返タリト云トモ、体失テ寄付所無シ」ト。其時ニ王、使ニ問テ宣ク、「彼山田ノ郡ノ女ノ体ハ未ダ有リヤ」ト。使答テ云ク、「未ダ有リ」。王ノ宣ハク、「然ラバ、其ノ山田ノ郡女ノ身ヲ得テ、汝ガ身ト可為シ」ト。此ニ依テ、鵜足郡ノ女ノ魂、山田ノ郡ノ女ノ身ニ入ヌ。活テ云ク、「此我ガ家ニ非ズ。我ガ家ハ鵜足ノ郡ニ有リ」ト。

鵜足郡の衣女は、焼き失われて自らが「寄り付く」べき身体を失ったと訴え、閻魔王の計らいでその「魂」は山田郡の女の「身に入った」と言い表す。ここには、身体と魂の関係を「よる」と捉える古い観念を一部に引き継ぎつつ、魂が身体を出で入るとする観念も認められ、新旧の過渡的な相を示している。

ついで、宝物集（新日本古典文学大系）巻第六、「第八に、観念をこらして仏道を成ずべしと申は」と説くなかに引証される、入り替わった二人の女の説話は、日本霊異記に直接依拠したとは見なされないが、そのよみがえりは次のように記述される。

もとの召人の依女を帰しつかはすに、ものさはがしく葬送を疾くしたりければ、犬烏くひ散して、跡かたもなくなりければ、今の召人の依女が骸にもとの召人の依女が魂を入れてげり。

日本霊異記中巻第二十五縁には、先に注意しておいた通り「魂」という言葉も「入る」という言葉も用いられない。これに限らず、日本霊異記には蘇生譚、転生譚が採録されているが、それらにも魂が身体を「出づ」あるいは「入る」という表現は一例も見当たらない。そのことは、日本古来の霊魂観、心身観[2]とかかわるであろう。すなわち日本霊異記が、人間を肉体と霊魂とに二分するのでなく一体的に捉える考え方にたってこのできごとを記述しているのに対して、今昔物語集と宝物集は肉体を霊魂の器として捉

えているために、「魂」「入る」という表現が選択されたのである。

霊魂と肉体の関係に関する宝物集のような捉え方は、中世に入るといっそう顕著になる。人間にその人の本来性を失った異常な言動が見られる時、その状態を「ものにくるふ」「ものつく」という言葉で言い表すことがある。

男引カヘテ「糸物狂ハシキ態(わざ)哉。定メテ物託(つか)セ給ヒニケリ」ト云テ

（今昔物語集巻第二十六第十二）

また、人が尋常でない振る舞いをした時、異常な事態が出来した時には、鎌倉時代以降はこれを「天狗の所為」「天魔の所為」と評し、「天狗（天魔）がいりかはる」[3]とも表現する。「いりかはる」とは、霊物が人間の中に入り込み、その人本来に取って代わるという理解であろう。

若き公卿、殿上人「風情なし。朝泰には天狗ついたり」とぞわらはれける。

（平家物語巻第八「鼓判官」）

かゝる所に信頼、信西二人が中にいかなる天魔か入替(いりかはり)けん、不快に聞こえける。

（金刀比羅本平治物語　上）

四　安元の大火の因

ここで、右のことを手がかりに、平家物語巻第一「内裏炎上」に語られた安元の大火の叙述を取り上げて読み解きを試みる。

それは、樋口富小路から出火して、京を広範に焼き尽くして内裏までもが焼失した事件で、次のように比叡の神輿に矢を射立てたことに対する山王の咎めと説明される。

是たゞことにあらず、山王の御とがめとて、比叡山より大なる猿どもが二三千おりくだり、手〻に松火をともひて京中を焼くとぞ、人の夢には見えたりける。

ところが、平家物語の諸本のうち源平盛衰記のみが、右のような説明の前に、比叡山の神輿に矢を射立てて流罪に処せられた成田兵衛為成の送別の酒宴に集った者達が物狂わしい心地にとらわれ、「これを肴に」と言って髻を切る者、耳を切る者、腹を切る者と続き、

ついに主が家に火をかけそれに飛び入って死に、この火が広がって内裏まで焼失したという経緯を置いている。

遺惜マントテ、同僚共ガ樋口富少路ナル所ニ寄合テ酒盛シケリ。酒ハ飲バ酔習ナレ共各物狂シキ心地出来テ成田ガ前ニ盃ノ有ケル時、或者ガ申ケルハ、「兵衛殿田舎ヘ御下向ニ御肴ニ進ベキ物ナシ。便宜能是コソ候ヘ」トテ、モトヾリ切テ抛出タリ。又或者ガ「穴面白ヤ、アレニ劣ベキカ」トテ耳ヲ切テ抛出ス。或仁、「思中ニハ大事ノ財惜カラズ。大事財ニハ命ニ過タル者有マジ。是ヲ肴ニ」トテ腹ヲ掻切テ臥ヌ。成田兵衛ガ「穴ユヽシノ肴共ヤ。帰上テ又酒飲事モ難有。為成モ肴出サン」トテ自害シテ臥。家主ノ男思ケルハ、此者共カヽランニハ、我身残タリ共六波羅ヘ被召出安穏ナルマジトテ、家ニ火サシテ炎ノ中ニ飛入テ焼ニケリ。折節巽ノ風ハゲシク吹テ乾ヲ指テ燃ヒロゴル。（古活字本　第第四）

山下宏明は、右の独自記事を次のように位置づける。[4]

大火を山王の咎として京の人々の目を通して受けとめるのではなく、山門との対立という政治状況に巻きこまれ、「物狂しき」心地へと追いつめられた為成個人の内面において捉えている。

「物狂シキ心地」に対するこうした解釈は、また「内面化された個人的意識」[5]と言い換えられ、次のように評価される。

つまり、『盛衰記』の編者は、『平家物語』に依りながら、しかも、『平家物語』を支える集団の想像力にはとけこんでしまえない、屈折した個人の内面を描かないわけにはゆかなかった。

さらに、このような「個人の内面」は、源平盛衰記の編者自身の「自己存在意識の芽生え」の表れであると説き進める。

しかし、為成らの行動を理解するのに近代的人間観のようなものを持ち込むこと、さらにそれを源平盛衰記編者の意識に置き換えてゆく扱いは正しいだろうか。

源平盛衰記の本文を正確にたどれば、そもそもこうした狂騒は為成から発したものではなく、発端は名残を惜しむ「或者」の髻を切ってこれを肴にとい

う行動であった。しかし、それはその者一己にとどまるものではなく、「各物狂シキ心地出来テ」と、すなわち宴席に集っていた各々、為成を含む皆が異様な思いにとらわれたのであった。さらに、源平盛衰記は「酒ハ飲バ酔習ナレ共」とことさら補足的に記述する。「共」という逆接は、彼らの行為が通常の酔狂の域を超えていたという評価であり、「物狂シ」とは、「物に狂ふ」つまり語の本来的な意味で人が正体不明の霊的存在に憑かれて正常でない状態になってしまった、しかも集団的な憑依に陥ったことを意味するであろう。そして、この場合、こうした狂態が繰り広げられた後で、家主が我に返って「我身残タリ共六波羅へ被召出安穏ナルマジ」と思いめぐらすものの、我が家に火をかけてしまうのは、一見冷静な判断に見えて、依然として家主が「物狂シキ心地」に支配されていたことを意味する。どうあっても大事は避けられなかったと源平盛衰記は語っている。

源平盛衰記は、これに関連してまた盲人の占いの記事[6]を加える。

大炊御門堀川ニ盲ノ占スル入道アリ。（中略）「占ハ推条口占トテ、火口トイヘバ燃広ガラン。富少路トイヘバ、鳶ハ天狗ノ乗物也。少路ハ歩道也。天狗ハ愛宕山ニ住バ、天狗ノシハザニテ、巽ノ樋口ヨリ乾ノ愛宕ヲ指テ、筋違サマニ焼ヌト覚ユ」トテ

火はこの占いの通りに燃え広がった。占いの的中は、「天狗ノシハザ」という判断の正しさを裏付ける。とすれば、成田為成の送別の宴に集った者たちの「物狂キ心地」の原因もまた天狗のしわざであり、彼らに天狗が憑いた、あるいは天狗が彼らの心に入り替わったためであったと言わなければならない。これが源平盛衰記作者の捉え方であって、送別の宴の狂騒の記事に続く盲人の占いとの呼応は説明過多とは見える（それが源平盛衰記の特徴にほかならない）ものの、明瞭である。

そして、それが中世の人々の理解である。事件を引き起こすのは人間には違いないが、背後から人間をそのように思わせ、言わせ、ふるまわせる目に見えないものの力が働く、それが中世人の人間観にほかならない。

【注】

（1）これらのことに関しては、森正人「〈もののけ〉の憑依をめぐる心象と表現」（『説話文学研究』第五一号　二〇一六年八月）参照。

（2）出雲路修『説話集の世界』（岩波書店　一九八八年）「三「よみがへり」考」。森正人「古代日本における死と冥界の表象」（高橋隆雄・田口宏昭編『よき死の作法』九州大学出版会　二〇〇三年）も参照。なお、日本霊異記下巻第二十七縁に登場する死者の「霊」は人の手を「操り控き」「食ひ」「裏み」「授く」などの動作ができるから、人の姿で現れたと見なされる。上巻第十二縁の死者も人の姿で出現する。

（3）なお、「天狗」と「天魔」については、佐伯真一「後白河院と「日本第一大天狗」」（『明月記研究』第四号　一九九九年一一月）、同「憑依する悪霊―軍記物語の天狗と怨霊に関する試論―」（『青山語文』第三一号　二〇〇一年三月）に詳細な検討がある。

（4）山下宏明『平家物語の生成』（明治書院　一九八四年）四「11『平家物語』の成立から覚一本へ」。

（5）『平家物語の生成』七「2『源平盛衰記』と『平家物語』」。なお、同じ趣のことが、新日本古典文学大系『平家物語上』（岩波書店　一九九一年）「『平家物語』の成り立ち」にも繰り返される。ただし、そこでは「出火の原因を為成個人、かれに同情する同僚たちの〈物狂はしき心〉、内面に求める」と筆致を少々変えている。

（6）なお、この記事は源平盛衰記古活字本では一字下げとして印刷されている。このように処理された本文については、日比野和子「源平盛衰記に関する一考察―別記文について―」（『名古屋大学軍記物語研究会会報』第二号　一九七四年二月、『日本文学研究大成　平家物語Ⅰ』（国書刊行会　一九九〇年）に収録）が、「別記文」と称して検討し、おおむね源平盛衰記成立時のものと見なしている。

【付記】

本論文は、中世文学会平成二十八年度春季大会（二〇一六年五月二八―二九日　大妻女子大学）のシンポジウム「文学の生まれる〈ところ〉」におい

て発表した一部で、「説話が機能をこえるところ」（『中世文学』第六二号　二〇一七年六月）に続くものである。